古今奇談

萬句冊

へ遠13
2017
4

へ 13
市 2017
巻 4

古今奇談莠句冊第四巻

㊅ 吉野猩猩人間ニ遊て歌舞を作る話

ぬるさ人ニハんせぞやと言ふ。花の山となりしけんと義セ一弦とめて花
見んとて吉野境ニ赴て。花のころ山ハ雲とうゆ多かるべきとそこ人の
遑をとられ。涙をそひ分ぬ。或ハ雲とうゆ多かるべきとそこ人の
此面彼面れ花をうて言興なるハ。ハんせぞやの人ニハ非ざる。右ニ左ニ
ニ山水の吉野一ニ遊あるず。山の山りうニ同ニ遊ぶ吉野ニて可ふ人
の姿まる逸ず邀あるう花ハ林の代ふ芳ひてうん尾葺ろりのくて
ニ高卓ろうう異猩を吉ひまるひまるもあんう散ずうぬハ山
山中の猩ニハあるずして。奥の花ハ一時ニ咲ハちう散ずハさく
らと口号あるハ近ごろれ花ニんなるむりの禁廉ハ谷ふう昇
きニ添ひ曲うて今の金れる居ニもいるし言同谷の序側を

のぼりくだりてめぐりあるん南朔とまろうて輦路漸く開け。祇園
日吉辛崎も教法よハあれど。水よ隠める勝地ハ文瀧西河よ辛
尽し。本源ハ巴ヶ渕とや。山より出て山を環る水の咽んで流る
潺々たる音ハ耳と洗ふらめく。川上の徒流皆こゝよ流て遥よ紀よ
達る。峯中よハ急流の流瀑布の無るもの多し。金乃山嶽の
名ハ地主金峯の壮ふりとゝて雲よいたしる密厳成就の地
と標しゝ石仏も据みべらるゝ。古くかゝる作り。桂の木立いゝ
き連て峯がちなる所を深く分入る。乃あるぬと。西より来れ
ば二つ田の渡めるやゝ狭く。狭よりゝ水よやゝ狭さ。ゝの石とゝや
いつくゝより。近くゝるゝとゝまゝせまゝ。山気よ音ゝ。怪数孫舎
出谷よかくゝひ。大首ふして馬尾あり。氣ハ蹄よ踏べく。髮被ゝと
る間ゝ斜なる眼光さらめゝるハ。見るん義経の手ゝ拝ゝるが仙と

あり。はありて岸よ嘶ゝとゝぞ。南の深きよハ縋ゝる虫とゝや。紀動
幻のごとゝ。ひさびゝ年絶ゝるゝ世を歴ゝるゝもあゝめ
とゝ。雲我なゝ風を含ゝもゝ青とゝよ怪数あり。斬て倒セバ風
をゝて包ゝ。塑ゝ。古昔禽獣れ拒よ備をゝるゝ。人を攫て本
よ掛ゝゝハ大熊ゝやあゝし。それゝ功波ゝゝを壓て頂巾載ゝ。條掛
被ゝて。護法よ役せられて後ハ。人を傷ハ。を悟ゝあゝも。雲ゝ。
交ゝとゝよ人もあゝなゝ。深きゝも蟒蛇擣ぬハ金乳を厭ゝゝ。後の霊
あゝ。神仙の宿ゝも。花よハ。ゝ。ずゝ。天武の神振山ハ勝れ上よ聚ひ。
又回ゝゝ。ゝゝハ天瞻よのゝ。人ぬひ。日義れ堅の岩窟ハ國ゝ山よ列な
王。此よゝ。ゝれゝ身の伝れ涙の両ぞ。在五西河の幽谿よ仙ゝ。ゝ長
旭日乃邃窟よ脱裙ゝ。ゝと。倶よ昔ゝ。俗作ゝ。都盆ゝ生ゝ。
乗法華を励ゝ。中院谷よ忠信ゝ骨を彩き掛接婚よ義経の名を

樺く。因位の高貴ある弘陀如来を苔の滴水に炊き。静女の妙技なる法
樂の舞を繰織の中に奏す。岩金の鞭路雄略の行実は花の乃に辱う
せざる平城七代の帝家願を垂れふ。名匠異法を彫りて探ゝんとせば彷
彿なる人も倦やまじらん霊泉奇窟は修験の九穴と称ふるのみなるべず。
晴窟の弦を迎づる多く。清土の難災城は拙ふ。凡そ泉穴乃事は生れ
穿るに起り。又金ある山は必ず焼あり。人智の逸さいつを始と知ることな
しゝ。城山は護良王乃拠ひ。宮城は行宮は建武年を累て拔而と
なるゝ中殿の法は當時の高ちを摸ゝゝうと世ば伝許の法場
司百て加陪場ぐらし。此の庭に弦を結びて政我頭ちゝ。山鳥ゝ
りの小逃林ゝうかうと叫て寥ゝとまゝる我。還幸と逆ゝ少て耳を
収ばせゝ大家人の感慨深く。そのちゝ我を殲すれ敵ゝ逐ぐ。山不に
迫めゝれゝる震襟さゝそとゝひやをゝれ。世は平はゝうやとかう

そめふ駕をとゞめらゝゝせゝて。百の司も備へゝもぐ。礼儀どゝゝゝ
て行幸もなく。亡我の軍計のゝなれば。佞てれ家の記も彫ゝるま
でゝく。宮固なゝぬゝとゝゝゝ伝くゝる中に。護良王れゝあむゝに
歯を咬ゝぐる人情の情ゝを世ゝゝ。後村上の世時和和弘
とゝゝ女あり。是は桃井直常の一族に右馬ひとゝゝに人石川の加
名生のまゝて発ゝゝる時。一人乃むすめ我吉野宮中に宮侍さ
せゝる。生乃聚さうゝ父ゝ膝下まて彫ゝ奥じゝゝいゝゝの白拍子
をもかぞゝ舞ゝれば。和和ゝとは百ゝれけゝは。時に芳の高ゝて。
山宮の姫ゝゝ伝侍して弘舞に妙ゝに容貌端正に音多麗妙ゝ
て。幽情延語ゝいゝゝて。は少人破枝之に堪ぐ。傾城の色ゝはゝゝて。一
ゝびゝゝりの必す去ゝゝゝなゝさ。遊度ゝゝゝ人心をむゝて
ゝゝ又酒を礦ゝゝる法をゝて。水景能遊ゝゝ。和和弘才能ゝる人に

遊び業の義をゑしらバ互にむつまじく常に御遊のかざりとも
なり。彼を海のねり出るゝハ小くぐりたるめどもに京までも其
戯れ行ハきてんゆくまでの刻りのとかせり。山高の中さゝハ幼少
の時又は奥して出る羽の羽衣れ下に年経る。近き邑に俳優の
徒あるて里民を技を能をそれをあひ深くて。落語に芸を劇と
いふハ俗名にて。扮演ハ拙を生ハ似るなり。唱ひものるて勇健にかゝ
るを発科と同じ。お諢ハ笑ひあり。態度ゝ為を舞と云。調曲逸
多れ次に白あること皆漢劇の雅あり。身の挙動ハ指と仮るとを左
右のこゝを云ゝ早く重く猛く迷く後ゝ為るをゝ云ゝ小
おほく多ゝ多ゝ御欄の舞れ左右の肩に貝紐絡ハ故あるべし。
我ゝ為ゝ態ゝもあるハいさゝ邪情なけきバかゝはもるなゝん凡
出を技ハ奏てけゝず見者ハ鼓吹のこゝろてゝ。妻女ハ言に姫女

に向を伏て起居場立ゝ敬ゝて動
作粧飾あり。妓女ハ言に嬌羞なくゝ。妻女ハ分寡ゝくと敬ゝて動
す。半人乃拳動ハ老嫗に混じやゝ。少女の態深けきバ児戯を出す
上に乗ると下に降むと記に緊放あり。凡場に上てハ形態と云に
ゝべゝ。凡れ指ゝゝゝ物一倍劇ハ実情ゝ考へ出すを且わゝ
ゝとゝれゝ。ゝ度をゝをバ本来を考へ俗も技義ゝまゝ拙ゝれ
バ人の笑ひ歌ゝを惰ゝ念ゝゝすも生ず。態ゝゝて歌ゝ人魂と
ゝめて息を用て生を思へバ拙ゝてあゝゝ知ゝゝも無をゝれ
ゝゝ。角力ハ速に脱く負ゝを為ゝ人のゝ力ゝゝに入ゝハゝね
ど強ゝも弱ゝも無せゝゝふゝて。凡我ゝゝゝぬ徒ひものゝ義ゝと
辞ゝハ狎私のゝゝゝ。ゝに入朝せゝゝ様の教ひを義へと命
ゝハ。ゝを結来の頌歌ゝて言ゝゝゝ我先にゝて。結ゝゝ唱ゝゝ遊

れ舞ぬるとぐし。是ら只態を舞と程式舞との分なり。笛を遥
に延て吹出されて八舞拍子ずるうあり。二段だうに変を打八席を促
なり。態をやうに出がくくて。又謡曲八囲合を失へば行うたう
のうう。彼聲者の唱へ山伏の花見に扇おつとり刀さいてと謡う、
弱法師を妖霊星と少侍るに八あるべ。田楽の家にてよくひご言と
なりて常に かく謡へなりそし。絃八あれど身れ知く八乃ろ人悦ひ
笠の〻。穿て苔の動く八勝ろ〻 稚あるべし。俗劇八男女混用と老旦
式武生に用ゐど武生八男優のすなり。和田酒盛の又郎八剛生なり。
小神の又郎八軟生なり。又狂ろこと常をかく手乳ようとすと云
ども。誓約の言と発作の勢ひ八對まれ面をたとへろ冥さあり。
神を及す事八男優八おもきもの。さに軟生八今もするあり。神几帳
してありうろうろる臉の。志ぎ〻傍き八映ゑるでさ。そめざれ八紛情

ふし。是も昔八水干の神を自ろづくるあるを。今八神也くても被
ろ。土方に流て一同ふ〻ぬあり。唐劇八鬼形に虎面を用ふ。素面
ふ虎班かくの起ろう。男女れ脚色芸に雲肩あり。鈴を執て追ふりの呂と
らくて刺んと〻 逃るりの胸を護して顧く。東技八わされ味ふ頬を唾
ろ〻。西技八ぶろれにを開く。扇を変く。扇者の執てくざす扇をそぐく酷
とうう。九のにぎをさ戦態とうに神の字と混じやまさう。戯場
求を結んで軟技の人を催し出す物のを春牘と名て。辞もものろう
ろ〻ゆ〻て。是の編て歩れ正〻ろ〻ぬを瀝きふく表ひ迫る乃
拍子あり。て。樂家の作へあるとて。世に弧舞を作てるあ八ろ〻も舞
鼓もちる所あり。て勘能に八達をべし。故色を貪ると衛と。人乃枕
席を抱くに八ろ。是をんく賓客に供るに八敬うも背ひ。殺も無も
ろうろうろうて晴に八用る所なるべし。静ら産家義ろうして程なく。志

人心を屈し曲げんも及ぶべきにあらざるべしと。皆ことごとく伏せしめ、ことばなるべしと。しかるに、正平七年、足利直義、無て高師直の勢に圍まれ、終に生きながら密かに南朝へ内附せんと志し、関辺の諸武士に成次よりたりうてやへ入きたれしかば、南方の諸大将高師直、疑を抱く。左兵衛正行、其無て同候さるに近来、倉と抱るとおもひ、鉾肩を〻ぶ後日の禍原と思ひ、今年の時に降を待つかなるべし。密てのとあきらを許して、誠を試さんとあるふりして、降を乞ませられ、遂に邸宅の内法に及ぶる。まられども直義、なほ解べきよ、あらざれば、小朝の内にも忍ばれ〻。始終よんば、武り、関辺三郎を浅へて、披露、石堂兵部と仮名して、まうろうに物動作、実も足利の逆徒、人、平日の諸書、ことごとくあり。実に失朝れ、按察の典侍なり。

南方として、大塔宮は最後まで、抱使唤ヒ、人あり。石堂と云、直義、浅ましきまうぬとさぐり、呼て、伐ち内奏して、武士に命じて、諸罰せるべしと、訴へ求られれど、腹心の文武と、内後せ〻ふ。近臣、侍も、納も、互に計策を尽し、究めるに、不安まれば、高恨を変むるに、よあらずとや、なほ、つもの、ひて、出家、さすると、南方たあるバを、罪を、赦して、恥を、居つきと、頼く、奏せる。元、山、懐、南朝の一人、侍に、よりて、折る、觸を、席に、隠して、言葉の根ざす、節を、ばこ、ハ、拳、我に、及ばハ、大義、論なく。為に、敵を、逃さ、ひ、むし、漢代の、末つ、習の、昭烈の、時に、許、逸と、胡潛と、中、逸く、公、事に、協、意に、励まさんと、閉く、倡優に、命じて、南方、行幸を、ひ、拐さ、備に、大命、席に、を、抜優せ、しめ、ろ、ま、も、あれ、ば、逸に、劫ひて、と、和、ある、余、ろ、隙の

御振の俳伎を催さる。齣劇三場のまゝ祖きてる躑躅ヶ崎の劇よ。新
曲を作り添て。戯名我揚宴と称ふ。伊ち直義を服の役直義の慈よ用
ひ。和歌よ南の方と拵さ。むさ之れば。執奏せ。我勢を以て陸人よ
對決せ。むと。我名人の外れすなれば道背ぬたりと思へど。是ハ新系乃
心を探り又ふと新郎よひて角と演伎を。直義も是ぞ大
事あれと。伊の見なき体よて。かく一身を寄せるゝハ包ども汝よ
さこ。ヶ高恵の徐勾畏るゝ和あんや。忠ぎをさされ不勘なるは衆
英の笑ひを蒙ぐれども。武士のすよあゝねば。狗る形よあゝと市文
市ける標の卿色已よ伎合宮うれば。渕辺よ旗奴を拵さ。むは和
上。一場よ南北左司の淨。芝よ名和氏を移る。和歌よ森を蒙べる。宮
姫民家の女子等。二十五人を用て。散きバ雪の衣を尼姫代よ立。む。
森監よハ故篠塚乃女子保賀の局撿行を。父の勇力を稟つぎて武思

あり。頻め号令して。戯文よ遣ふとあゝバ狭の杖よて一石打んと。蒙
しき容をやゝかる流眄よ人ゆゝるハ。花の下よ緑て電光よおのく
ゝ地をゝん。裘の出樹なまぐも。端殿よ祢辺の出麓を蛍て君の出様ぬ
城設け。文武班列よ沈ゝて次第を。絲竹金鼓ハ幕の内よ調し。第一よ
守屋稲城軍の衣揚樽。第二よ西國落の静森。右國已よ沛りなゝ裳
して。躑躅ヶ崎乃旗与ハきやひわる拍子ばと。上下国を拭て待よ祝
そなゝれ

躑躅城旗與

あかぐ。鳴る浪なる子。ゆれも国ゞあるさきゝ子。ゆぐべし。君ハ山路
よ出つゝ君もなくいやゝくゝ。初し我遅ぬゝるゝゝてつゝゞ
城保ちかゝく芝まで。和を未ゆるゞ。師傅ハいまゞ来ゝぎるゝ。乙
いやと只今遣つゝさなりてひ。ぬゝ出保ちゝく出ゝ乃ゝを拵く

る農家のやいハ。山前より芋瀬の庄司う塞ぎて高弘を凝
ふとゝて。君も已も修験道ハ立寄しぬまハ。山伏よおいてハ不足な
く別義あるまゝ。くいべし。若くハ故ゞ君を取こめまする時。某一らと
なう。計畧をもく山跡よづきて赦ひまるゞ。よ高城故ふく通
しまゝハ。後生ゝとも某をとゝ通しゝとなひ。ハ義照ハ山面
よためしひ。山後ようまゝふゞるそひ。かる大切の儀よ陪んで山後
を敷きまるすハ。何ごゝうんゆうなくんゝとも。山免を蒙るべくなひ。然
らゞ師傅程なく来る。我よ遅しむゞらんゞ。皆くまゝらん。某んやを
山辺の奴原ゞ裂るとも行程のすれるゞき。今ハ我を遅給らんゝ。ゞむ
ひひゞし。いたいぬゝや。帰乃旗を此よ停めまする。大九下乃ぬ
原北旗きゝふえゞき拾ゝと。云もあゝゞ旗竿よ伐搭き。ハ旗奴
ハ旗を放ゝゞとすまゝを旗もゝとも中ふ拝げ。傍よ薄る大の

男共ひ抓てゝ西よ許抛ちやり。山旗をゞゝ肩よかけゝ乃
山後追てゝ。怪力勇乳ぞめゝまゝ。武畧の程ぞめゝまゝ。
司ハ芝よ脇を化しゝ。抱後ようゝ出て。背をんやゝくめが
き出ゞ。あれハとゝをゝさるまゝにゝとゝ。てゝゝく我よ
撫盃ゝ。彼が随ゝまゝゝ。めよ老ゝハ逐ゞ通ゝ。山ゝ斗もまる
年も。左司ハゝとゝと舌を吐ゝ。逐ゝき義勢ハかゝゝゝ

同　撮宴

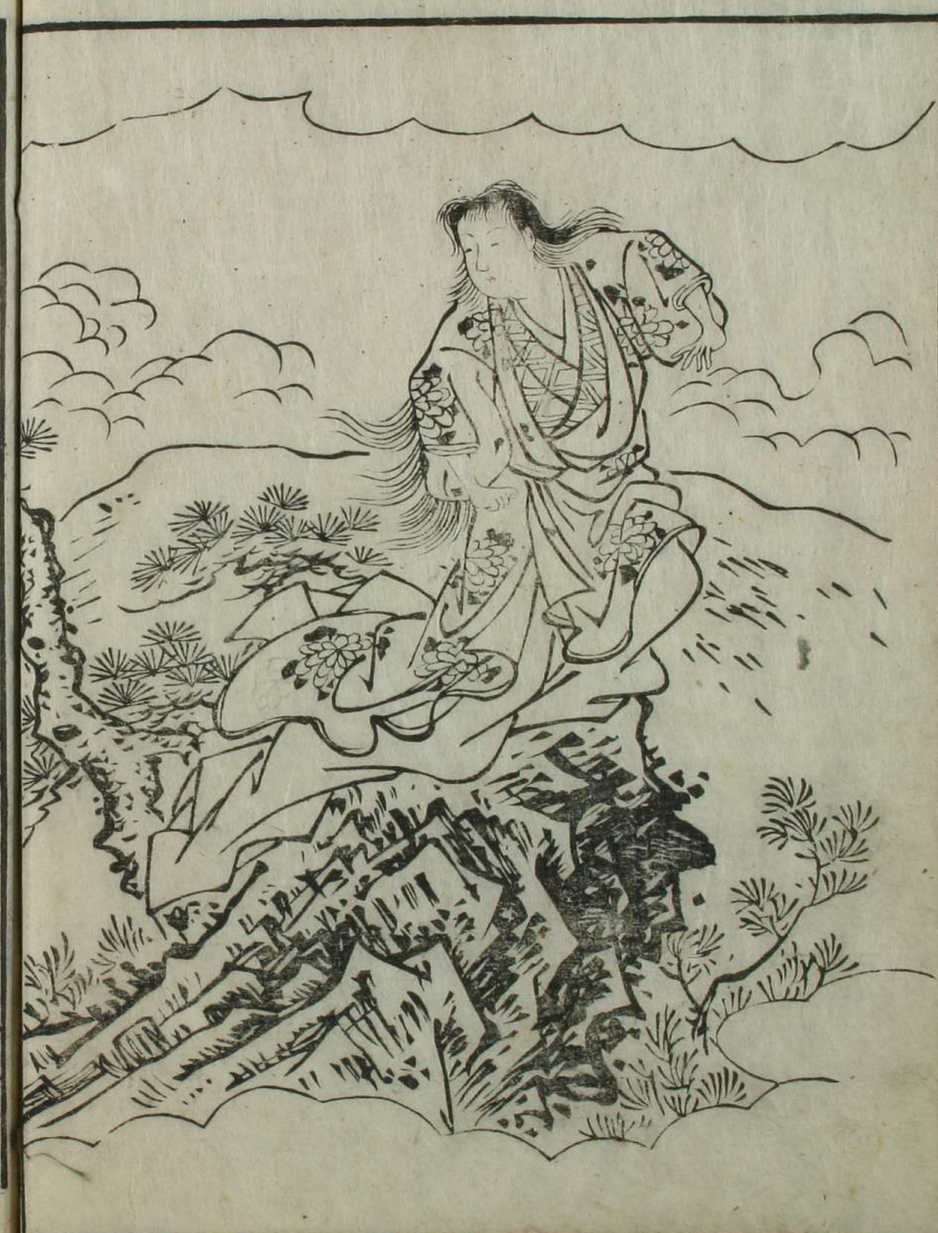
古跡といる邑の名ハゝ。君まゝゞきかゞゝゝやゝハゝゝ建
武二年。遠倉の古牢ゝて直義よ載せゝれゝゝ。大塔宮よ絡付せ
ゝ給ゝんとヤ女すてゝ。最あゝ変よつゞが塚を築て相撲人乃が大
軍をゝゝめゝひゝも。岩菊ゝゝんよ落されて。村上義照ゝ名を絶ゝ。
つゞれゝを懐よして。穴股切ゝゝを辺ゝの再び流離れゞまる

土地となる。かゝる事さうれ昔ハ菖蒲原乃縮に倣ひ堀に囲栖の巻に
與る。今ハ義帝の恨をはらし。よく漢楚の業を移さるゝも世
に比類なし。是利の速技。高潔なる肩を壓され罪を悔て降
参ずるも友軍れ大名城語じ大に酒進るゝて。暴ぶめをめ
しひろいハそ下あれハ暴奴のやうにて多ういねいるめ乃役
けやなはは日ぬく今多ゝ新ゝ多ゝ強邸の門千筋しる白沙を右
たに米ひてる。逸ようせの板塀屋く。大紋に風を含めて郎等のく
つに巡る簾除く一筋引ける幕に入る。客人の数ハ彼ゝで。小当
に比ゝ多ふ之木一茎に触土居も稼に。磯ぢさ樟木を吋に多ゝる
花の宴新ゝ多て磨ゝの内酒の音もねぢずいへ。ばるゝ内進め
ひて席をれ抱へ引されゝとねうひい。山海の珍物を内地をのるふ
いつハ誰ゝも暑のかぎうたうへいべし。誰ゝある物数をなれひら物

に多ゝんふ。ひ白物ふハ行ゝて遅ゝさで左ハに只今多ゝれゞ。物乃数
れ附ゝる様数に入ゝひ程に。沿の座に陪ハせ垂い。信条振く出し
ひく。畏う。敬き八雲たゆめハそれの芝に立て白ひも色も行らせん。
あゝ不興や。席に隠んで烏帽子も捨て。袈ゝ裟被ゝて振ふぶた
るハ信の様数で。芝ゝて和殿が余しして害しなる。大塔宮のいまを
れ引ゝ多ゝ多ゝてあんゝ多ゝ。拆ちの牢とかハ地を堀下して板ひゝ。
月日の光ゝ八ゝそ。夕の湿乳に入ゝ芝ゝ多ゝずに多ゝ多ゝ多ゝ
ふを。ひろけゝ利す刃刃に多ゝ嘶て咬砕ゝ。憤怒の焔を吐て蛮
しゆゝ猛男しれ相ゝ多ゝ。身を縮ゝ抱も芝ゝ
多ゝ。芝朝命ゝ多ゝあゝで私曲の勢に多ゝずや。直義ハゝで面を伏
せ言ゝ多ゝ汨の出ゝ芝ゝ。時言ハ却る芝れ汝に出ゝ汨に多ゝ。足利殿
乃を始。於の討ゝ多ゝ引ちゝ丹波路ゝて模ゝ多ゝ小方弗ゝ多ゝ拳執

ハ足歩すでも蹴蹴られ。五義まくも面を伏す。名和乃長氏客の座
ようやいろは白拍子。益ふさ性事を沈んよう孫しく今孫を弄いく。
殿ハ皮軍最初の忠臣舟の上れ行宮ゑ家と身を去きてる拾折の
門ふも。幼くぞや赤松一堂の領をづき戦模ゑ幼う朝敵を離しい我
よう与へて逆つる。家足の計策ハ家ゑ出て蹴蹴られ。稚ゑ足身
将家れ計略を失ひ。内乱を通てい朝へ。形勢ハ変るんぐせ浮う貌
れを集う足ゆ口つ乱て蹴蹴られ。色ハ己ぐ家事ゑ及びいる外よ
ゑ推量の熱言とない。名和ゆ中ハかる上ハ行を隠しかちん。とて
も れ身ふいハ。清前ゑ変る渕辺を去れて。そ時のはるさ毎と今孫
ゑ変て。かひるさしまて足ゆ中しくくそいハ。はるよくて。五義麿を離
を一新の黒そで勤できなれども。此ハゆるさせあくと年寄れ言をのづ時。修験
乃局渕杖えなほ。ゆく折んをする眼ぐ。ろしく。やて戯摩ゑつて。

渕辺を去まてもあくいゆ。サ年ゆつくいハ。宮久しく土宰ゑはを屋乃
和ゆんゆ地拍狂ハしくゆくて。せのゑと弟う。はを髪を剃らせたま
ちくはんゆ地をくしくてと。渕辺ゑおほせてれ髪を剃を色と
ひよしを踏しくるゑはんをやくもかくつせのいて。ゆ力ハ強か
ゆくろ。ぜん方ゑて渕辺ゆ身を脱ゑんゆ乃不為なるゑはゆ。ゆ一戦
えをれと変ゆるひゆゆゆ乃不為なるゑはゆ。ゆ一戦
や墓居ゆつけてゆくいや行程ゑ幼をかざりいゆも。渕辺ゆ罪ハ
行ゆ罪ぞや。朝家の頼を信せ宇ゆ大塊ゑを空して。形んを振
ちん下ゆ。楚人の義弟ふもまゆろ。罪を猛しめ。情ゑハ誰
ゑ蹴蹴られ。五義自ら罪を幼いい。今ハ宥ゆせおいしそせゆ。ゆ人
今ハ懲ゆゆ散ゆてゆそゆ。ゆ。ゆ。ゆ九重を御して一ゑ子
を変ひゆふゆわゆハず。色ゑ来宮乃足利ゑ反ゆろハ君れはを内



意ありてれば。是利よりも恨めしきハ敵意ありふと常ハ独うそ
ぶきし。人間は種なるぬさへ拾むをづるの世乃変化日の味方ハ
明日乃敵とハ知るべし。君が為ハ捨ハ拾げおほせず。生を殺し仏罪
を受ても居等の迹ハ忘らるべき。実是ハ今年の躍れ角と存
ぶ。千仞の大木ハ花よ独うくし。寄根が嶽ハ色もときそう
宮多の富士れね接ども尽ず。幾来ひれ恵のあけぞ乃さやそさ
日つきれ家居ゐる

直義面目を掩て詳收まバ。衆人宿を憐う一旦ハ敬して去るべ直
義の日ぶをぎ拙うぶしを称義す。陸うふ直義陸う年の身と用
んして。良ハ小勢へりれ少くれるよ石堂と仮名をるぶ。近臣花光
二郎を陸紬。容貌似るを初より假り乃形代として。その身ハ表れ
八郎として来の君となり。かること我仏ともえハず。南朝人なりとぶよ

知ひ給りて邸をきりかる正行ハ俗人の心をた考へ敵意と受
しらバ彼も大度の名れいぶ答ちと信就せ。義態の君く別くる
ふ和人ハ知るぶうるると。当ぶ紙を書と若ハ新邸ハ初て生の仮名せ
ぶて高徳のやく。英雄の断機を志ぬをうるわくその執念さかとく
も正ぶ度ありしくるふ。代の系内ハ陸ハ陸のう正行譲ぶぶき軍務
れれるよ年うくと南朝の高制を詳く告て別くいぶとて意ハ下
て的を射る。直義ハ人数れるハ我ハまるるものるしと紀をりけ
寧れ帥を殺らん正行云。小兵能的中せバ公とらるくら家ハ帥た
らんと。射し射ることまでくふして。こに中をはて退く。当ハ陸て
云の今年ハ家なるぶ滞ぶあるまでと云直義怪びて。私の陸ハ所

直ち強梁をかさして進退を四人に正行云。公ハ小方よりかつて威勢を包ミて結ぶ人近年より師直必ず敵国の軍を率て西国より向ふ〳〵。我我ハ弘法を決せんと。考云の領する西接の地ハ人勇ゝ素剛もちろしゝ。是を加勢ゝ出さぬ又夫〳〵て此朝の忠ゝ傍人ゝ師直死ずと軍ゝ折負ハ勢枝衰ゝべし。勝ゝバ云れ家いよ〳〵安らゝ。時に服れ一族を正しくて此朝ゝ移〳〵来る。正行ゝ代りて軍府を目り師直ゝ害を遂ゝ。已ゝ一族の逆ゝ逆ゝ忠動を択て出拔揮ゝ流ふべしと。云言の理あるゝ服して。此ゝ拔ゝ蔬鬢して慧源と法号し。ゝ八師直ゝ驚ひを敬ゝ。時ゝ高りて身を保つ乃始ゝ。旬ゝ八僕良王ゝ迷魂を感し。三年の後敵を西ゝの張本と云。彩て後ゝ和死乃お許ハ和田伯某ゝ嫁し。條塚乃局ハ楠正儀の妻と云ゝ。時ゝ高階の執事威枝郡ゝ赫〳〵ゝ。随従るゝの輩の局ハ容儀

あるゝ妙姿あるゝを伝ゝ聞て。是を取て妻ゝ傍人ゝ。日比同者を旬朝ゝ移を入〳〵めいろ〳〵てゝ盗ゝ出し〳〵ん。是を方国ゝ捧て結の山路の間乃を名ゝ。古世の武士逐来て樂を遂ゝ。京ゝ〳〵も師ゝの兵卒教培て。改ゝ斯係ゝ及ぶんゝす。かゝるまて一倍も出さゝる巷の局樂の内より魂と云出ゝを妖紅梅の小袖ゝ赤き袴の裾を曳て。ゝの〳〵ゝ岩上ゝ出ゝ。ゝ向て。我を伝拍とゝ云ふ怪ゝふして怪ゝを知ゝ。是れ人ハ知ゝ。我性清ハ志ゝ。ゝ人ハ知ゝ赤髪を拔ゝき系服せゝ。彼猩〳〵ハ所れ母ゝ。ゝりの八海島の聖人ゝ。彼ゝ〳〵波の音芦系ゝ。ゝ風なゝて八踪ゝ。ゝべし。我ハ名山の長秋ゝ雲て巡橋乃君ゝを願めんゝ。ゝ八拔ゝ遂ゝ息ゝ。伝ゝ他人を尉めん。日ゝ。ゝ我傳ゝ限りゝ八兼てゝ。ゝ。我方れ人ゝ。ゝ。ゝの文ゝも能ゝ語して年ゝ位偶の是を伝ゝ。ゝ

色を霧ふことハ蓬ゲ島の遊びもく。庖厨ハ已ゞ礦せ〜ハ。山宮の
瘴氣を除き寒暑と惰ちぐ〜。安〜ゑ下臨〜てん〜きれ
世の応ゑ。か〜こくも庭空せと中ゑて。翡翠の書盤ゐ紅鶴の絲
戎乱〜きく龍去て冥〜と霧ふぐきゑあ〜ね。南兵ハ系家の間
者を遂排ひて。攻り来り山中を逆〜咲ゑう。是をなん右世猛く
やゑぐさ。彼山ハ秀霊の薮深なきばかるゑ〜

⑦ 大高何某義を厲〜影の石ゑ賊を射る話

南朝ハ元中九年。北朝ハ明徳三年の冬。南小和義個てきゑ又十六年
ゑて一統す。然きでゑ小朝の臣も君臣治ゞ家ゑ多ゑ。南
方ハ高家遺恨散せず。殿堂ハ起ち。一統の後又十三年。小朝乃文
安元年ふいゑ。きゑ皇流を奉じて蜂起〜。西南の玉ゑ号令をゑ
と已ゑ七年。諸方の武士来り馳りの日ゑ加りて。勢ひ和代ゑえられハ

ゑ屬圍ハ貢抱。水ゑ深〜陸ゑ軟じてあいまゑ。伊勢の強紙兼政ハ多
乳彩ゑて冨有のきゑえあ〜しゑハ先朝ゑめさきて出ゑ花りゑゑなさ
きゑゑ。ゑ子兼次系向〜。先朝ゑう傍至れゑ米粉幾ぐく城上
納〜。狂ゞバのゑゑハ角ゑ元て後ゑう裔らもゑされひ〜と中
ふ。一朝派ハ〜く先例ゑ依て年人佐とゑされゑ。保昌又帰ゑ家ゑ
きゑひ至〜ゑりの。幾振義勝を欺〜ゑ。ゑ能法和先代ゑ推げさ
ゑ例ゑきゑぐひて進〜ゑゑ程ゑ。味方の諸士もんいさゑ〜くゑ笑
えゑゑ。南朝柱石のゑゑゑ楠正勝ハ。合戦の時。又正儀ゑ別立〜。系
正元ハ京ゑ入り仇を刺んとして遂ゑ忠死す。ゑ後ハ十津川ゑ入て
已ゑ四十餘年。此時ゑ及て老を極むといへども。雄烈を失ハず。帝居ゑ
系向〜て衣と芸ゑ無復を計ゑ。又大工れゑゑ伯ゑ国祝として。匠材の
上ゑあゑゑ。皇宮の侍へを器〜報人として来りゑれゑゑゑゑゑハゑ

ねとりて面うげちうを接せゝめんとて庚午の秋小澤といふた例
れ要害に帝居を經營しけり小山の庄と称られど其地は粉迦岳を西
に負て東は勢乃飯高へ僅に近し帝居を造られて後は四方の
て系家のハそて抽なれくぬらんとおもして年ゝ仕うりのもづるう
らず遠宮成つて三年をうれた後同年三月三日次帝ちの人
来て幼言のこゝ仕ふうて後を待ひすをまむを泊に是は二人ゝ仕
来の主人石見を命ゝ年ゝ赤松濃祐ゝ家人なり赤
松法人の徘に加り小方にて出身の害をなし家を起ここあさゝ
南朝れ一方に成り血脉を一那こも任せ後我為人を付せ一め身
は小系に在て南方れに同者をおうんと一船ねれ越を南帝可とし
て そのうこ義のうたゝうれ例もあれゝ是を納人と諸士に付せて正
勝に計る正勝熟思して下ハ行ようう乃時は我朝に勢ひわ

ア。今日乃裏へ行を物て小方の被反志を傾けん又正儀ゝ在しは
河内に居なゝ小方に降しも。君ゝ世も系代もつきうと姫を
嘯めるを已ゝ必ず拒ゝ帝は偏に人を沉ん
とおしうれはおもバなつけて試こと三を待に準ひ久ハ不日
に為人南朝にいう。日勅仕り他事なく小方大小乃兵止日夜に告
来て奏達と第才幹ふして上の旨にもふひ忠をそすと人
えう。正勝ゝ行へもるを同ひ謀り下知を受け。郎系を用ろ
とな。正勝を弱けて常に行ろ或時中邑云作人吟物ゝの
先云は張良ゝ作くうる三器肝要れ多一枚人ゝひて武器秀結
ふと思ふ。主人石見幼少の為に是を授けく。身ゝ子ゝ片端を風
に作くうき而なゝ様の事もけ朝ちさはしく傾きもろう今國
をはしうて忠勤をゝつ。主人器を授けゝ芸に朝系の益にもか

ろぐしと世ともくひ入てゃーふぞ。正勝云。今同一の味方となりて。身
を忘ることを秘すべきなあるべし。されば兵等も必竟ハ忠信を懇畧
ふしてるを用ひざれば。本刀を戦ひもて戦ひもて。其刀を勝とあ
たはざるごとく。魂宮ごとくまバ用ゐ堪へど。世を六韜三畧ハ七つの書を
教へ入まされど。務め侍るべ軍法ハ今日戦ひの常を別ちる勝る拙
おし。張良が黄石公を受ける三畧といふハ。上中下の三計をそこ
来よりて遅速急の三ツ様。平旦鶏鳴半夜を聚て如此なるべしと
説示し。そはを尚りとる主老の師とあるべきを迎の急務を辨
す。本朝のむりを入鹿ハ入鹿を傳んとて。遠を公相学を托て南淵
先生の所を。遠近の路上をて潜を大をを計られし。皆密事ふして
一人を語ることあり。今和殿をも投けてさるあり。凡て事を陰ん
て。上中下を定むべし。先下の策ハを許ゑ二の忠を尽さんとられた。

新参なきに重く任用せられず。ゆ朝ハ此国今の投石山深く攻
撃の及かさ様愛へ。返て忠の者を切て此朝を傾けんとする時か
きバ。短を長よん変じて。新を様投をて小を恨るの志者ハ。を身
れ生死いまだ知べらず。或ハ色を効として。主人の敵を殺さんと欲
すとも。元来赤松謀逆の罪まて面を出しかたきを。又謀逆の所為
を功ふして。其の罪を免されなんと。国を不忠をあるためしを。
後必ずそれを倣ふりのあらんを故を執達の人ありとも。是わ
バ。智慮あつて納ず。却て罪名を受ぬべし。中の策ハ目今新参の初
念を変ぜず。石見伯ち赤松の嗣子と云まて此国を屬し。此朝
れ皇運を危じて。世を一統せハ勿論。和儀御ふとも。愚慮なまと幸
の行宮を為る所を従て。禄微ありといへども赤松の士を教てれ先ハの
罪名却て主事を狩りを孫後世を恥ることなるべしと。此の利害

聽居るゐ肝弱きこと色青ゐり て伏すもあり推して。ゐる論勝を用ゐめし。今ゐの上は策ハめ伺と
同ゐ。正勝ゑ。上の策ゑも言かゝ。中邑も心ゞ〳〵弱く吟んと希ふ。
正勝ゑ色ゞ〳〵ハ耳ゐ入るまゝ〳〵なるまゝ〳〵なるもヤなり。今紀勢河摂の
間ゐ山朝へ内志伐屬する大家二三なゝ〳〵皆擬積のひを侍ゐ。和殿
ゐ人乃進退を見熟ゑ。小方ゐ流言せゞめバ。ゐ人まゝも禍ひゐ及べゝ。
ゑ吋罪を免ゐ〳〵兼ての方伎ありや。たゐくハ色ゐ色ゐひ立ゐ色かゝ。
ゐ人倍々とゆさゐゑど赤松一族の末ゐゐ。ゐゐ播州ゐ行ゐ
赤松満則ゐ談して彼を味方となゝ少。近ゐ山名発向して満則を
攻ゞきゐゝ我ゐ告吟せり。此吋我山名ゐ伐て。攻ゐ仲ゐて満則と心
を合せ戟を返して京師を攻ゑ。已ハ河内の畠山をかゝ〳〵ひ。宇治
小栗栖ゐ出てゑきゑめ。東ゐ乃里見京因ゐ細朱ゝ同時ゐ旗ゐさ

せて。鼓角の勢を張ゝせゐバ。バ幡代室居赤松ゐゞ。満祐の血脉政則
がゆされ計策ゐ。向後ゐ答出ゐ〳〵。正勝又ゑ。ゑハ日城空ゝく送ゐ
ぬ上策なゑゞ。播州ゐ伐事猶疑なゐゞ。たゐバ狐ゐ化を義へ
ゐゐ似れど。小方へ伐りを求めて此土地の擬ゐゑ我ゐゝゐ
図ゝておゐ。吋京を以て告知ゝ。ゞゑ表ゐゐてなゝて。分を
全ゐするゐ。ゑ上策なゐゞ。中邑豁を射ゝれて。後の解伐ゐバと
探ゝゑゐ言ゞを。穴とゞけゝて感伐の禍ゐ。明断のゐる下遠ゐ宮
見ゐゐ。ゑ伐ゑセヤゝと。ゐ称万射ゝて退ゑ出ゞ。正勝ゑを副て彼二
人を外ゐの勒役ゐ配り用ひ。内ゐゐハ用ゞ。二人も新系ゑゑバ斯あ
ゐゞゑ事とゐゝ。向後ゑ京ゝ。神器の供拙ゐゝて。事を正勝ゐ
計り申ゐ事の序なゑバ見ゐゐハ笠置の序没落吋時ゐ。武家諸元を

○英雄開續編 巻之四
○左中弁 賣扇六・四
十九

る神器粧しく。そこにて仏を造りて。誰ウトさまの正一ゆつてさとゆ。
正勝云。是ハ武家の談ぎごとなるべし。君の御身よりほひの徳わるべ
ゆて。皆外命をなる江あり。神器のる奪ふ。此朝の百姓ものるしぬ
れ分意城。拵ふ初んとする京家の人よりて秘そぐられ。嗜方も誓約
の人よ非ざれハ告ず。去りてあるる國の富有を知るべ新而あるものふり
と。毛府よいざふひ。一ツの名を取出し。忠ぶ。是を神璽ともゆさハ
ふるひふまでと。軍家の二寅とる地人有の。地ハ此朝乃機而よそ
天統乃害。大敵の樹よ非ざるとゆ。人の知る而人ハ伊勢の國司
先代の高家。海を傳る四方皆高民なり。新ゆ。是ハ江内の土地
よ居るる家の子あり。皆壊墓を抗とするのたあり。有ハ役此第あり
と。莊家よ命じて編を抗て国ゆしめ。内莊宇磯敬兼改ぶ一紙千
貫の沈文。一紙千俵ハ券子教抗第よ充ゆ。此三寅傳ゆずしてハ良

亮ぶ才ありても我ふとあくハず。狡兎常よ三窟の計をあり。乖人懐て
兩頭船を踏とハ該あるべど。西江紅を踏とハ人民ハ好む而よあらぶ次
とさとゆ。同江を殊の厚きよ弱ゆ。四世の將材をしかずと称歎
す。秋性きを要ゆ。此而の婚記もあく十六年よ及ぶ。時よ南朝乃
元中元年ゆ。六十九年正月二十九日。日輪東よ空りて二形至ぶ。弱
時ゆて一形ハ漸よ消失て一輪とある。正勝寿なるふと人とあ
て。天を仰て毛敬をるゆ教奏。已ゆるふ已ゆるれと。ぶ言ぶ
ふく此紀ゆ。江よ尾張海辺よ生立るゆ知てゆ。天を我辺
よてハ日江と名づけ。敬而天ゆ。
あり。江ぞ大將の臣ゆふとあゆん。正勝何乳もあく退きて。腹心乃
一族よ使ゆるハ。九月月の流ハ古今一ツなり。只今時の地乳ぞぶふよ
つて臣を吳ゆ。彼海辺ハもあゆバあれ。我此山中よ元を入る時ハ

帝王の奥殿よりかゝるべきうつ。日輪ゆゝしくて国を治し。孫ゝ不和あり。
今為れ日の光ひ出るや。そ一ハ映じて傍らるあり。傍らるの遂よ
消して一よ放しうゝ。光彩放裏へて嘉放さらんう。望運の歌ずべ
き不なうと深く憂へられども。味方れ軍威孫培けきバそひうみる
うよ有るれど。軍務よ務きくあるをの法。正勝久しく小畠殿よ
徐ううれバ。彼よ切音信て時の変法して為るついで。河端の正盛う
宅よいうてそ胃ハ法よ歌宮うべしと腹巻ときて足を伸しけるう和
盛よ語よ出て憤を寄ようよ。ごるる猛よ弓うの矢央低きく敷
を失ふがし。いぶうて色必す城堂を侵うをけるう。或ハ大切の仇を脱
きたしもるうと。忘よ正盛よ告てんせ。ひ正盛うるよいさうう常よ
ハいずひ星のねゝひハ遠よゆうよくくをさるう自然の天乱
あう。翁の国うて遂ひられとい正勝ひを擁て云。今ハ辺ハ乱乃形。
朝儀よ興ゝず。南朝の天文至よ入べうゝ。我国よのを遂ひうるは
尚ゝ深切なる而のがゝべうゝ。ゆ去れ南光さんゝうあるふ。近法
鳥合の左軍新系の孝あうをバんゆるしかし。こに安逸して明
日を待ハを機よ急ることわうと。時よ発ゝし。微ゝの法若ゝ人か
をバ人数を後けゝくと。四司の方へ人をいて告ゆ。法十給人役
道をれて。東川よ向て馬を馳う。実よ間う中邑ハ神宮を奪ひて南
帝を失ハんと深をうゝくゝ。正勝兼てんえて近侍よ内属しぬを
ゝ。其役宜をいゝず。南帝兼てを之の小家よ潜幸ありしをいわまゝ。
正勝よ怪うてたゝひひとと久し。此時彼が家よ行うる、行人て。下
格ふ乃後絶にをでよ名のうて。返う遊ひふうふ比。ハ住所人等よ
かうを命せられ。戎服ゝされ女ゝよ附して庭を出せゝ。あう深秘
よ非六在すれ殿の方よう。中邑乃侍出まう。内裏を家人よ負せや

系。南帝怪しこと思せのよはは。女人婆乃下よまかりて。ゆる。焼矢よ小敵
袋ひきん殆揉を。只今ほと北より告知せいよう先祢宮をかく
してこそ空を迂しまるくさと。諸しげよ奏されども。ゆれ能改よ
かくまかけきハ。卒よは樂をろうさせあゆ。女人鮒をふう供を乃樂
丁を返さしひ。南帝のれよを捧を。たろう赤へて二三星ざろう切は。
南至我ハ囚をとハなしこそて命を停と宣ひて密こして就ろせ給
丈手。今ハこて中邑勿弾るくと殺しまう。まるれ衣甲冑をさぐ。衰
さうふ南廂の南ふあるやこうよてさせ給よ。小朝乃長孫元年山は
十二月二日なう。婆丁ら叫びよびこうふ弟士多く出て追来う。女人をや
らと取らこむをのぐ思て今ハ身もつう巳られ。弟の石を後干よ
こうて大きよ。我ら小朝の命あうて南帝を退治して帰
るなう。仰う後日乃罪を知ずやと問て。京家の人れるす和尚を見
ようせあひて。ゆらの答ろべしと。ゆれ人皆後日を顧る。そは大高
助之郎ゆるのん到よ義信あう。そ日よく起て田をうよりんとて
ろ有よ。人殺しあると叫ぶ多再よ入う。弟ぐ弓矢たちさきまく
ひ来る。東なる大石のおよ南人あう。只今男人を殺せ。体よて。龍衣
れ甲を弱よこうる。南帝を打まるよ遠ふしと衆を麾きそこと
たふ。伊ら。ゆる八明日の義あう。眼れわうろ入っ
よ思人やとしまろて一人を射る。脇を毎して一箭よ斃ゆ。ゆち色
中邑なう。ろ時期ひようろうざる我人て。まるれ衣甲をおきて。家形
みてのうれ去る。矢比遠ざうき八鼓をあうし人を集め。大高丘よの
ぼうて云。東萩京の先ろよ一隊れ来る人八我方郎家の様あう。必定
こて今の一人よ行金ぐし。皆こ此よ屯して。かろ時八往来をいまし
め用心せよとて。動うず。正勝八熟路を倍して狭谷の北よ。ろ時。日八

ヨキ〻昇ル。向ヒ合フヤウ肌具足セル男一人来ル。正勝一強ヲ見人て。模様ヨ迎ントヽロヲ下ヘシテ投ヘ〻セケルヨ。ハザルヲ待ヲ所なり。果して作野ヒを起し逃ヲ知ルヲ。又城を停て益なしと。鞭を抽てきくくふを背ヲ撲つ。殺さずてくをハ同者の又城るすなり。石塔流くおまて血を吐かゞら。匍匐逃ヲて知ようる。正勝已ヨ狭谷ヨいる。新ヨの変ヲ見ヲて大ヨ悲しミ。大高ヲ義男を称賞し。辛ヲる衣甲ハを不ヨ留めて。城を去の後記とるさしめ。礼をいて神野谷ヒ陽ヨ葬り。帝居れ給ヨ佛院王住山ヲ移して香火ヲ我奉ぜしめ。我身ハ再び十津川の奥ヨ隠ヲて遂ヨ老を送ル。西北一統ヲ山ハヨ立つてい十七年。ヲ同明減あれども。於能勇従ヒて有。諸葛忠武侯薨じて蜀ハ治安二十九年の久きヨ及ぶる。其高武侯の徳を知る。南方意乱の保不久しいるか。石見ヲ立功の揆を以兼て苦詩を用ヲる。大高ハ時ヨ応んで義ヨ進ヲる。ヲ成功ヲ論ぜ小ハ日し。只是遇と不遇と深ヲハ暴ヲ不ヲ知ヲし

古今奇談英雄冊第四巻終